

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. 72
2019

特集

博物館創設90周年 @明治大学



Contents

- 新館長・副館長紹介
- 博物館活動報告…公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.13
手仕事新時代—百貨店における工芸品販売のリフレーミング—
- 展示&リサーチ…法政大学・明治大学・関西大学3大学連携協力協定締結記念
特別展示「ボアソナードとその教え子たち」
- 市民レクチャー…江戸町奉行所の多彩な職務
- 学芸研究室から…商品陳列館はなぜ伝統的工芸品を調査・収集したのか?
- 収蔵室から………杉田遺跡の土器
- 南山大学協定通信／図書室から／M2カタログ／博物館入館者数の動き／
団体見学の記録／博物館友の会から

特集

博物館創設90周年 @明治大学

現在のアカデミーコモンにある博物館が開館したのは2004年4月のことですが、前身の3博物館時代にさかのぼると、刑事博物館が設立された1929年が明治大学における博物館創設の年となります。人間で言えば卒寿を迎えた博物館。今回は商品博物館、考古学博物館と合わせて、その草創期にスポットを当ててみました。

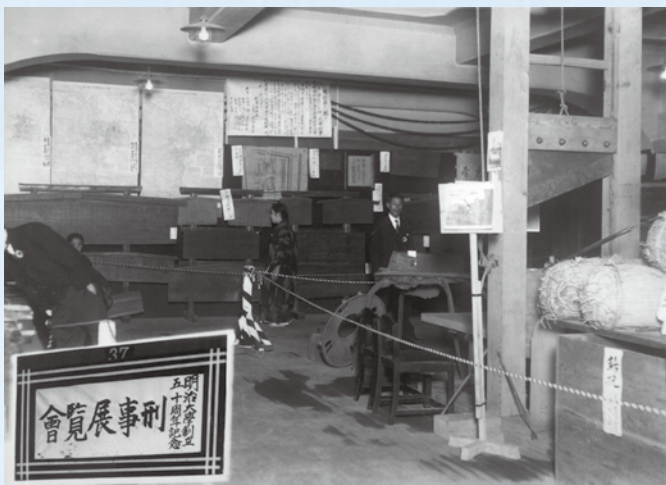
刑事

刑事博物館の初代館長となる大谷美隆法学部教授は、ヨーロッパ留学の折に目にした各国の刑罰関係の博物館にならい、日本にも同様の施設を作りたいことを念願としていました。当時の明治大学には法制史・明治文化史の尾佐竹猛や民俗学者の藤澤衛彦、刑法学者の岡田朝太郎ら、大谷教授に志を同じくする面々が揃っており、1928年(昭和3)の10月、博物館設立の建議がなされます。翌年には大学役職者と先のメンバーが名を連ねる設立準備委員会が発足し、翌年4月、刑事関係資料の収集が始まりました。

しかし、拷問具・刑罰具の収集は難航し、結局、同一規格の模型を制作することになりました。1931年には大学創立50周年の記念行事として「刑事展覧会」(写真参照)が開催され、会場には多くの刑罰具が展示されていたことがわかります。ギロチンと並んで有名なニュルンベルクの鉄の処女が制作されるのはその翌年のことです。関連資料として江戸時代の捕者道具や法令を板札に書き記した高札なども収集されました。1933年には収蔵品の写真と拷問・刑罰に関する論考で構成された『刑事博物図録 上』が刊行されています。

しかしながら、この恐ろしげな展示物はなぜ必要とされたのでしょうか？一つ考えられるとすると、当時の法学部における刑法教育に「刑罰は受刑者に対する教育を第一とするものであると解し、従来の応報的刑罰論を極力排斥し、又刑罰と共に保安及び矯正処分の重要なことを主張する」(『明治大学五十年史』)という方針があります。つまり、前近代における残虐で非人道的な拷問・刑罰のあり方を反省材料とし、あるべき刑罰の理念を考究する材料とする考え方です。

戦争の時代の到来によって刑事博物館の活動もいつしか停滞してゆきました



創立50周年記念刑事展覧会(ギロチン・鍬引き仕置の穴晒し箱等)提供:明治大学史資料センター



同左(獄門台・長柄三道具の展示)提供:明治大学史資料センター



真新しいギロチン模型（『明治大学五十年史』）

が、終戦後、館長として再興を託されたのが東洋法史の島田正郎法学部教授でした。しかし、島田館長は大学の附属機関としては研究活動との連関が不可欠で、学術資料を扱うべきという考えから、明治立法史関係文書と近世法律文書の収集・調査を方針としました。

島田館長は『明治大学刑事博物館年報Ⅰ』（1957）の巻頭言において「本

学の創立期の関係者のなかに、明治の立法事業に参画貢献した者が多く、従って本学図書館のなかにこれに関する資料が多かった（略）本学の学界に対する使命を果たせたいと念願した」「成文法を持たない近世庶民の法生活の実態を究めるためには、個々の法律行為に関する文書や記録の検討から始められねばならず（略）戦後の混乱によつてこの種文書の所蔵者である旧家が没落し、散佚する危険があり（略）学会に対する責務と考えた（原文ママ）」と述べています。

法制史料としては、図書館が購入した国学者黒川真頼旧蔵書の内、政治・法令関係の書物を移管、明治維新に際し司法卿・参議などを歴任した大木喬任関連史料、その後、年代的な幅を広げ、鎌倉幕府の御成敗式目、戦国大名による分国法など。近世史料は村方文書を中心に町方、寺社、武家文書にわたり、目録57号（1993年刊）までに収録された点数は13万点に上ります。これにより、法制史と古文書の博物館

としての性格を強くしてゆきました。

商品

明治大学商品陳列館（2002年に改称：商品博物館）は、1951年（昭和26）に商学部教員の研究グループ「商品研究所」による標本資料室として発足しました。当初はメンバーである教員個々の関心を反映し、原材料標本類と貿易商品が収集されました。

国産のビニロンはじめ化学繊維の夥しい標本から、日本経済復興の主役は当初繊維産業であったことが感じられます。貿易商品は穀類やコーヒー豆などの食料品が中心ですが、麻袋などに梱包された状態で税関を通るものなので、展示形態としては瓶詰標本となります。世界各地の米が揃っていますが、米の自給もようやく達成されるかという頃、飲食店で食事をするのに外食券が必要だったという話が伝わっています。また、陳列館でコーヒーを試飲するのが楽しみだったという逸話もあります。学生たちは新しい時代の到来を実感していたのではないのでしょうか。

1957年（昭和32）に常設の展示施設である商品陳列館が開館した頃から、漆器や陶磁器など、後に「伝統的工芸品」と呼ばれるような商品の収集が始まります。どのような意図でこうしたものが収集されたか、実は具体的に説明された文章が残っていません。東海道新幹線が開通する以前、カラーテレビも普及していない時代、東京で地方物産の実物を見られる機会は今日とは違った感覚であったはず。手作り・手描き



十手や鉢割りの展示 提供：明治大学史資料センター



普及し始めのプラスチック製品

の製品もまだまだ実用の普及品として流通していた頃でしたが、原材料標本として収集された石油化学製品と比較して、将来の趨勢がすでに見通されていたのかもしれませんが。

考古

考古部門のルーツは、1950年頃に明治大学記念館裏に開設された考古学資料室兼展示室にさかのぼります。これは、本学の考古学専攻創設者の一人で「日本考古学界の巨人」とも称された杉原莊介助教授（肩書は当時）が設立したものです。戦前から杉原氏が個



1957年に開館した2号館4階の商品陳列館

人的に調査・収集していた資料をはじめ、考古学専攻の初代教授である後藤守一が講師時代の1934年頃に実習で発掘した山形土偶や亀形土製品で知られる千葉県江原台遺跡の出土品などが主な収蔵資料でした。調査資料の整理や保管、展示を目的とした施設でしたが、学史的にも著名な群馬県岩宿遺跡や静岡県登呂遺跡など、明治大学の発掘による出土資料が急激に増加しつつあったため、本格的な収蔵・公開施設の建設が必要になったのです。

これを承けて、学生への実物教育を主眼とした本格的な施設へと発展させ

たのが、2号館4階に開館した明治大学考古学陳列館（1952年）でした。陳列館では、考古学専攻の発掘資料が収蔵資料の中心となりましたが、杉原氏の個人コレクションと購入資料を加えることで、常設展示では旧石器時代から古墳時代にわたる日本考古学の通史的な展示と、比較研究のための海外資料の展示という総合的な構成が実現しました。

その後、小川町校舎・記念館3階へと二度移転しますが、それまでの資料整理室と展示室に加え、事務室や全国各地の発掘調査報告書を排架する図書室が併設され、施設としての機能の拡充がはかられました。この陳列館が礎となり、考古学博物館（1985年）、博物館考古部門（2004年）へとつながっていくのです。



小川町時代の考古学陳列館



考古学陳列館の看板

新館長・副館長紹介



博物館 館長 井上崇通 (明治大学商学部教授)

2018年4月1日付けで館長に就任いたしました。小疇尚^{あざ}文学部教授・杉原重夫文学部教授・風間信隆商学部教授・村上一博法学部教授に続く、第5代目の館長になります。専門はマーケティングです。特に、企業と顧客の価値共創について研究しております。博物館運営にも応用できる要素が多く含まれています。皆さまに貢献できる博物館の構築に努力していきたいと思っております。



博物館 副館長 落合弘樹 (明治大学文学部教授)

2018年4月1日より副館長を務めております。専門は日本近代史、とくに武家の解体という視点で明治維新を研究しています。歴史学という学問は史料に向き合うことが不可欠で、旧延岡藩主内藤家文書など、利用の立場で博物館と接してきましたが、博物館の発展に貢献する所存です。また、文学部史学地理学科長を兼務しており、学生教育の場としての機能も高めていきたいと思っております。

◎ 博物館活動報告

MUSEUM EYES

公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.13

手仕事新時代

—百貨店における工芸品販売のリフレーミング—

商品部門は商学部の先生方と共同で手工芸製品の製造・流通・販売に関する調査・研究を進めていますが、2016～2018年度は山陰地方の陶器製品をテーマとしました。手工芸品産業は1990年代初頭の経済バブル崩壊後、どの産地でも売上高の激減と事業者数の先細りが言われていました。しかし、2000年代に入ってからしばらくの後、一部で従来とは違った力強い動きが見られるようになり、山陰地方においてもメーカーによっては注文に生産が追い付かないという、手仕事が見直されている動きがありました。

例年、調査・研究の成果報告として特別講義を開催していますが、今回は小売りの現場をテーマとして百貨店の最新動向に注目。百貨店がどのような観点で手工芸製品に着目し、どのような販売方法を採用しているのか、去る12月14日、株式会社松屋のリビング・呉服・美術部MD課長秋山功一氏をお招きしてお話を伺いました。

講義では、例年夏期に行われ、昨年で10回を数えた手工芸製品販売イベント「銀座・手仕事直売所」が事例に挙げられました。「直売所」は、従来のモノ中心のテーマ設定を見直し、売り場で作り手が直接顧客に対応するという、“売り方”をコンセプトとするリフレーミングが特徴ですが、松屋銀座の半世紀にわたる工業デザイナーとの共同作業によるノウハウの蓄積から生まれました。よく見られる出張販売用のスペース提供ではなく、百貨店がまとめ役となり、集まった作り手たちと企画・運営を共同しているのが特徴で、直売にオンライン情報を組み合わせた新しい型の「作り手一使い手」の関係づくりや、生活観に基づいた商品のセレクトによる“スタイル”の提案という手法などが印象的でした。



講義風景

※この講義の抄録は『明治大学博物館研究報告』第24号(2019年3月31日刊行予定)に収録されます。

法政大学・明治大学・関西大学3大学連携協力協定締結記念

特別展示

「ボアソナードとその教え子たち」

村松 玄太 (明治大学史資料センター)



展示室エントランス

法政大学・明治大学・関西大学3大学連携協力協定締結記念特別展示「ボアソナードとその教え子たち」(以下「本展示」と呼称。会期 2018年7月7日～8月5日 会場 明治大学博物館特別展示室)を開催した。

本展示は、2017年9月25日に本学、法政大学および関西大学との間で締結された連携協力協定の一環として企画されたものである。同協定に基づき、難民高等教育プログラム特別入学試験、合同海外インターンシップ、入試広報の合同実施、体育会スポーツの交流戦、図書館の相互利用等の連携事業が計画された。それらと並んで、本展示及び講演会(2018年7月6日開催 村上一博大学史資料センター所長講演「ボアソナードと3兄弟」)等の「ボアソナード関連イベント」を実施する運びとなった。

そもそも3大学はその創立に大きな共通点がある。法政大学は1880(明治13)年、本学は1881年、関西大学は1886年といずれも1880年代に創立したフランス法系の法律学校をルーツとする。また3つの法律学校の創立者たちに欠かせない共通性がある。すなわちその多くがフランス人法学者ギュスターヴ・エミール・ボアソナード(Gustave Émile Boissonnade de Fontarabie, 1825-1910)の薫陶を受けた

「教え子たち」であったという点である。ボアソナードは1873(明治6)年、明治政府の法律顧問として来日し、1895(明治28)年に帰国するまで、およそ20年間にわたって、日本における近代法典の編纂に従事し、傍ら数多くの日本人法学者を育成した。これらの貢献から、ボアソナードは今日「日本近代法の父」と讃えられる。本展示は、ボアソナードの事績と、その薫陶を受けた3大学創立者たち、そして今日の3大学の活動を振り返り、世界史的な観点からその意義を改めて考える機会にすることを目的とした。

協定締結後の2017年秋以降、3大学の担当者が展示の準備を進めてきた。まず、3大学で巡回展を行うことを決めた。明治大学での展示会ののち、2019年2月23日～4月22日に法政大学(ボアソナード・タワー14階博物館展示室および外濠校舎6階展示室)、同じく6月11日～7月20日に関西大学(関西大学博物館)で展示を実施することにした。

本展示の柱は、大きくわけて次の3つである。第1に、ボア



ボアソナードの事績展示コーナー

ソナードの事績紹介(生い立ち、研究業績、法典編纂、法曹育成、ボアソナード没後の評価など)、第2に、3大学創立に関わったボアソナードの教え子たちと各大学の歴史紹介、第3に、講義録など3大学の教育資料や、映像資料を活用した歴史紹介である。

展示資料は原則として3大学から持ち寄ることとした。上記第1の柱に関連する資料としては、①ボアソナードの法学研究資料(著書“Histoire de la reserve hereditaire et de son influence morale et economique”『遺留分とその精神的経済的影響の歴史』など)、②日本での法学教育や教え子との交流、法典編纂に関わる資料(「ボアソナード講義筆記



(上)ボアソナード使用と伝えられる机
(下)立体物を多く配した展示

ノート(井上操筆記)」「杉村虎一宛ボアソナード書簡」(本学蔵)、“Premier cahier pour les questions”『ボアソナード答問録』(法政大学蔵)、③ボアソナードの人と業績を顕彰する資料(「ボアソナード胸像原型」「ボアソナード肖像画」、没後追懐事業「ボアソナード教授記念事業発起人委員会」(法政大学蔵))等である。また、ボアソナードが使用したとされる机(本学蔵)、そして安楽椅子(日本大学図書館から借用)を展示した。

第2の柱に関連する資料として、関西大学からは、その創立に尽力した小倉久や鶴見守義、志方鍛資料、そして草創期規則等を出品した。小倉旧蔵のルイ・ヴィトン製トランクは、日本に現存する最も古いもののうちの一つとされる。また同じく小倉が遺した写真アルバムは、司法省法学校関係者等の写真類が収載される。鶴見が着用した大礼服の展示も行った。立体物を中心とした関西大学の資料は紙資料の多い本展示にあって展示に華を添えるものとなった。法政大学から



映像紹介コーナー

は、東京法学社(法政大学の前身)開講の趣旨、初代総理梅謙次郎の書などの資料に加え、『仏民法売買篇講義』『新法典駁議辯妄 全』『仏民法契約編第二回講義』『民法集解』など、創立者や関係者たちが、ボアソナードの講義を筆記・刊行した貴重書籍類の出品があった。そして本学は、設立願書、学則、「五大法律学校連合討論筆記」、創立30周年絵葉書、卒業証書等の資料を出品した。

第3の柱に関する大学共通の資料として、当時の講義内容を知ることができる講義録や、受講生による講義筆記ノートをそれぞれ持ち寄り展示するとともに、各大学でこれまでに制作している大学の歩みに関するビデオを展示室の一角で上映した。

資料の展示のみならず、解説パネルも展示内容をわかりやすく伝える意味で重要である。ボアソナードの事績や3大学の年表及びその歩みの紹介などは、3大学が分担して解説文を執筆し、パネルを作成した。また、技術的な側面では、巡回展示で繰り返し使用することを考慮し、剛性のある解説パネルとした。東京と大阪と距離を隔てた大学間の共同展示ということもあり、いくつかの工夫を要したのが本展示だったといえる。結果、本展示は延べ展示日数30日で、来場者数は3,866名であり、多くの来場者を迎えることができた。来場者に対して取ったアンケートでは、3大学それぞれの違いを知ることができた、といった共催展ならではの感想を得ることもできた。本展示を通して3大学の連携を深めることと並んで、共催展の意義や実施にあたってのノウハウなど、様々な知見を得られた。今後の同種事業の実施にもつながる大きな成果だったといえる。

4月22日の法政大学での展示終了後、関西大学での展示が続く。施設が異なるため、展示資料や見せ方が異なってくる。ぜひ足をお運びいただき、その「違い」も楽しんでいただきたい。

(なお本記事で使用した写真はエントランス写真を除き関西大学年史編纂室より提供を受けた。記して感謝する)

◆◆◆◆ 市民レクチャー ◆◆◆◆

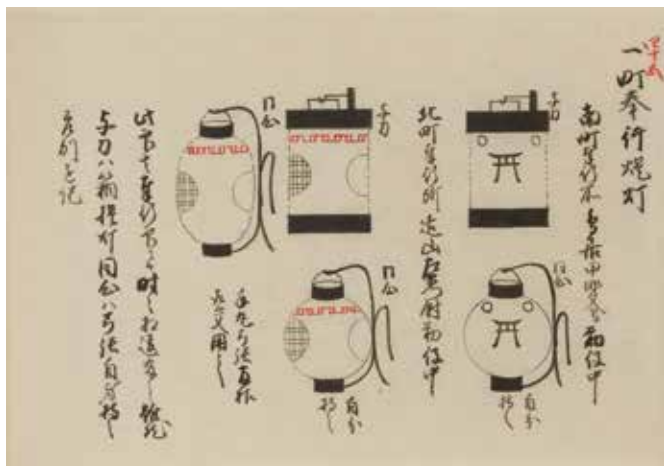
江戸町奉行所の多彩な職務

滝口 正哉 (成城大学非常勤講師)

江戸町奉行所の通常の職務

江戸の町人地を管轄する町奉行所は南と北の2ヶ所あって、それぞれ与力25騎、同心120人が配属されていた。幕末に同心がやや増員されるものの、南北合わせて300名程度で町人人口が50万人におよぶ江戸の市政を担当していたわけである。その一方で、町方にはきちんとした自治組織が形成されており、町奉行所はそれを前提に成り立っていたということがわかる。

この町奉行所には多くの掛（分課）が設けられていて、この“少数精鋭”というべき与力・同心たちは各掛



衡門類例秘録 町奉行所提灯

に数名ずつ配属されていた。彼らはともに御家人身分でありながら、各掛では騎馬に乗る格をもつ与力が上司であり、同心は下役とされていたが、なかには同心だけの掛もあった。幕末に存在した各掛をまとめたのが右の表である。時代劇や歴史小説に取り上げられるような、裁判や捕物・仕置の場面がよく知られているが、実際には地味な事務方の役職も多く、幕末に向かうほど業務が細分化されていったのである。

裁判には刑事裁判にあたる公事と、民事裁判にあたる

訴訟とがあり、あらかじめ吟味方与力が調べ、例線方与力が先例・例規の取調などを行なった上で奉行は罪人を形式的に取り調べて判決を言い渡した。なお、町奉行が独自に刑の宣告ができるのは軽犯罪の者で、奉行所の白洲に罪人を呼び出して言い渡したが、重追放以上の場合は老中や将軍の決裁が必要であった。

また、定廻り・臨時廻り・隠密廻りは「三廻り」と呼ばれ、いずれも同心のみの掛で、市中の取り締まりや犯人探索にあたった。時代劇などに登場するのは定廻りだが、三廻り全体でもいかに人数が少ないかわかるだろう。

そして奉行所内でもっとも力をもっていたのが年番で、明治維新をむかえて新政府側に町奉行所を引き渡す際、諸記録の引渡しなどはこの年番が実質上の責任を負ったのである。

これらの掛では、その職務内容はいずれもマニュアル化がかなり進んでおり、実態は事務方役人の要素が強いことに気付かされる。

「出役」という臨時業務

ところで、町奉行所にはこうした本来的な業務とは別に、臨時に課される業務があった。これを「出役」というが、ここでは2つの事例を紹介したい。

祭礼出役は6月15日の山王祭と、9月15日の神田祭、そして6月15日の赤坂氷川祭に出動するもので、山王祭と神田祭は隔年で行われ、祭礼行列が江戸城内の上覧所を巡行することから、「天下祭」の通称がある。また、赤坂氷川明神の祭礼は9代将軍家重の産土神であることから重要視されるようになり、神田祭と同じ年に行われ、上覧所への巡行はないものの、天下祭に次ぐ規模を

幕末町奉行所の役職

| 役職名 | 与力 | 同心 | 事項 |
|-------------|----|----|---|
| 年番(方) | 4 | 11 | 奉行所の会計、組内の監督、同心分掌の任免、關所過料などをはじめ、奉行所内の総括的な仕事に当たり、諸掛の中でもっとも重視された。最初は文字通り1年交替の年番であったが、後には抜擢して任命されたものが継続して勤めた。 |
| 本所見廻り | 1 | 3 | 享保4年(1719)4月、本所奉行の廃止にともない、その支配地であった本所・深川を町奉行の支配地に編入したため設けたもので、本所・深川に関する諸般の事務を取り扱う。上水、下水、定凌、坊橋修復、橋普請、道路見廻り等のほか、鯨船と呼ばれた2隻の船をもって、洪水の際に橋梁や人命の保護に当たった。 |
| 養生所見廻り | 1 | 2 | 養生所は貧窮病人のための療養所として享保7年(1722)12月に設けられたもので、幕府の恒常的社会事業施設として注目すべきもの。この管理と事務に当たる。 |
| 牢屋見廻り | 1 | 3 | 小伝馬町牢屋の監督をする。 |
| 定橋掛 | 1 | 2 | 幕府の費用で維持する橋(御入用橋)の修復や新規掛け替えに関する事務と監督をする。 |
| 町会所掛 | 2 | 3 | 寛政4年(1792)設置の町会所(町費節約額の7分を積金させ、江戸市民の救済事業をする)の事務を監督する。 |
| 古銅吹所見廻り | 1 | 1 | 江戸の古銅を集めて吹直す銅吹所(寛政7年〔1795〕本所横川町に設置)の業務を監督する。 |
| 高積見廻り | 1 | 2 | 防火のため炭薪材木等を積んでおく場所と高さを制限し、その違反者のないように見廻る役である。元文4年(1739)に設置。 |
| 風烈廻り・昼夜廻り | 2 | 8 | 風烈廻りは享保17年(1732)3月に設けられたもので、強風のとき放火犯のいないように見廻させたのが最初。巡視の途中、防火桶への水の汲み入れなどを町役人に注意する役。昼夜見廻ったので、後に昼夜廻りと呼ばれたこともあり、別々の掛としたときもあった。 |
| 詮議(吟味)方 | 10 | 18 | 公事(裁判)を担当するもので、民事・刑事ともに扱った。 |
| 例線方 | 2 | 6 | 罪人の罪状を記録編纂し、判決の案を渡されると書抜き帳を繰って前例や類例を報告する。大岡越前守忠相の在任中より始まる。 |
| 赦帳撰要方 | 3 | 7 | 赦帳掛りは、罪人恩赦のときその調査をし、帳簿を作る役である。撰要方は、奉行所内の各書類より必要なものを選んで分類記録(撰要類集の作成)する掛で、大岡忠相の在任中より始まる。 |
| 町火消人足改 | 3 | 6 | 出火の際に町火消の防火(人数や出場区域に規程があった)や進退を指揮する役である。これも大岡忠相のときから始まる。 |
| 猿屋町会所見廻り | 1 | 2 | 浅草蔵前の礼差の会所(寛政元年〔1789〕12月設置)の監督をする。 |
| 御肴・青物・御鷹餌取調 | 3 | 6 | 將軍家御用として江戸城に納める魚、野菜の購入、鷹餌の調達についての諸役を監督する役。 |
| 市中取締諸色調掛 | 5 | 13 | 天保改革のとき設けられたもので、経済方面や出版・風俗などの市中取締に当たった役。 |
| 隠密廻り | 0 | 2 | 奉行に直属して秘密裏に探索する役。江戸市中でも、もっとも権威あるものとみなされていた。老中・若年寄から奉行を通して、特別の秘密調査をすることもあったようである。 |
| 定廻り | 0 | 6 | 市中を巡廻し、法令の施行状態を視察し、犯罪人の逮捕など、警察のような役目をする。寛文2年(1662)に設けられている。 |
| 臨時廻り | 0 | 6 | 定廻りの予備隊のような存在であり、その職務は全く同じである。定廻りを長く勤めた者がなり、定廻りへの指導、相談に応じる先輩格であった。 |
| 評定所御出座御帳掛 | — | — | 評定所へ老中が出座する日における事件名簿の調査・作製に当たる役。 |
| 火事場供引纏役 | 0 | 2 | 大火で奉行出馬の際に随行し、諸般の仕事をする。 |
| 門前廻り | 0 | 10 | 大老・老中・若年寄の毎月の面会日はそれぞれの門前が混雑するので、その取締りをする役。 |
| 下馬廻り | 0 | 8 | 礼日やその他で、大手門などの下馬所が大勢の供などで混雑するため、これを取締る役。 |
| 両組姓名掛 | 0 | 2 | 両組与力・同心の姓名帳簿(禄高、分掌、年令、勤務年数なども記入)の作製をする役。 |
| 用部屋手附 | 0 | 13 | 奉行の用人の差図のもとに、判決案の調査・作製に当たる。 |
| 人足寄場掛 | 0 | 2 | 無宿者や刑余者などを収容した人足寄場(寛政2年〔1790〕の設置)の取締りをする役。 |
| 定触役 | 0 | 3 | 臨時に出役する事件のあるとき、同心担任者の触当をする役。 |
| 定中役 | 0 | 10 | 臨時触当により出役するものである。 |
| 鉄炮稽古世話役 | 0 | 5 | 同心の中から砲術に優れたものを選んで助教師とした。 |
| 諸問屋組合再興掛 | 4 | 1 | 嘉永4年(1851)諸問屋組合再興にあたって、その調査に当たった役。 |
| 外国掛 | 7 | 45 | 幕末、外国使節の江戸駐在にさいして設けられた役。 |
| 箱館産物会所取締掛 | 1 | 2 | 北海道産物の売捌をする会所の取締り役。 |
| 新地家作改 | — | — | 新開町並地の家作の建坪・畳坪・地坪などを調査する役。享保6年(1721)8月より同16年(1731)まで設けられていた。 |
| 地方改 | — | — | 大岡忠相が町奉行兼任のまま享保7年(1722)6月、將軍吉宗より任命されたもので、同8年(1723)6月以降は彼の南町奉行だけでこの仕事に当たった。新田開発に非常な業績を残した。 |
| 硝石会所見廻り | — | — | 江戸近郊から採取製造された硝石を収集する硝石会所を監督する役。 |
| 当番方 | — | — | 庶務、受付をするもので当直、宿直をして夜でも受付を行った。分課、分担のない者が交代で勤めた。 |
| 開港掛 | — | — | 横浜および江戸開港、開市に関する事務をつかさどる役。 |
| 町兵掛 | — | — | 幕末に江戸市中の治安維持のために組織された町兵を統制する役。 |

註：佐久間長敬『江戸町奉行所蹟問答』より作成。なお、配属する与力・同心の人数は文久元年における町奉行所1ヶ所の人数で、「—」とあるのは人数不明である。

誇った。祭礼出役の与力・同心たちは、神輿・山車・附祭からなる祭礼行列が神社を出る際と還御する際に確認を行なう役と、巡行中の交通規制を行なう役とに分かれていた。また、上覧所周辺は目付の管轄下になるため、山王祭では半蔵門から竹橋門の間、神田祭では田安門から竹橋門の間は目付が取り締り、目付への引き継ぎが厳重に行われていた。

一方、町奉行所には在方出役というものもあって、19世紀初頭にはその存在が確認できる。これは犯人が江戸から外へ逃亡した場合、探索には手先(目明し)や関東取締出役、天領の代官や遠国奉行、そして近隣諸藩の地役人などの協力を得て行われた。基本的にはその案件を担当した町奉行所が在方出役を命じるのだが、定廻り・臨時廻り各1名の2名体制を基本とし、場合によって1名増員、あるいはもう片方の町奉行所の出役と協力体制をとっていた。

幕末に北町奉行所の臨時廻り同心を務めた山本啓助

は、江戸で事件を起こし地方へ逃亡した犯人を探索する在方出役の旅に何度も出かけ、「廻り方手控」(千代田区教育委員会所蔵)という史料を残している。それによれば、大半の場合、現地に派遣される定廻り・臨時廻り同心は、すでに捕縛されている囚人の受け取りと江戸への護送の任務のみであり、このように形式化された任務ゆえに彼らは旅の道中で名所などを巡ることが可能であった。しかし、吉田松陰を下田から護送する際や、清河八郎を探索し捕縛できなかったときなどは、かなり緊張した出張となったようだ。

近年、明治維新直前に与力を務めた原胤昭が残した史料群が発見され、こうした具体例が徐々に明らかになりつつある(千代田区教育委員会編『原胤昭旧蔵資料調査報告書(1)~(4)』参照)。この史料群の発見者の1人として、これからも町奉行所の実態解明を進めていきたい。

商品陳列館はなぜ伝統的工艺品を 調査・収集したのか？

外山 徹 (明治大学博物館商品部門学芸員)

1980年代への着目

2018年8月22日から9月18日の会期で、企画展「地方創生の機運—1970～80年代の伝統的工艺品収集—」を開催した。この展示を構想した原点は、2017年度の特別展「鳥取の工藝文化」開催に向けての調査中に会った一冊の書籍にあった。鳥取県商工連合会が刊行した『明日に向かう因州和紙』には、「物充足による成熟文化の時代」における「消費性向の多様化」による「多品種少量生産」といった記述が見え、製造者・販売者の連携、地域の理解、デザイナーを含む多様な人材の参画、(商品の)入手の利便性向上、イベント開催と観光資源化などが述べられていたが、それは今まさに伝統的工艺品産業の現場において取り組むべき課題として喧伝されている事柄である。しかし、この表紙のデザインもやや古びた感じの書籍が刊行されたのは何と1982年のことだ。つまり、当時認識されていた課題は、四半世紀はゆうに過ぎた現在においても未だ課題のままなのである。そこで、あらためて当館商品部門における1980年代の伝統的工艺品収集を振り返り、当時の記録に目を通してみることでより何かを得られるのではないかと考えたわけである。



「地方創生の機運」展の展示風景

明治大学商品陳列館の設立

博物館商品部門の前身は旧商品博物館—2002年までの商品陳列館である。商学部の林久吉教授・吉岡幸作教授らが組織していた研究グループ「商品研究所」の資料室として発足し、当初は石油化学製品をはじめとする原材料標本や、穀類・コーヒー豆・鉱物といった貿易商品のサンプルを収集した。1957年に常設の展示施設である「商品陳列館」が開館するが、ちょうどその頃から地方物産品の収集が始まり、館の収蔵する伝統的工艺品関係資料の多くが、この後、1966年までの収集による。その意図するところは、残念ながら具体的な記述として残されていないが、1966年に刊行された『商品陳列館 概要・目録』の口絵写真が地方物産で占められていることから、それらを重視していたことが理解できる。もっとも、当時においては今日で言う「伝統的工艺品」という概念自体が未成立であり、あくまで商品全般の構成要素である地方物産への着目ということになる。

同年の初夏から始まった学費値上げ反対闘争を契機に、向こう数年の間、明治大学もまた学園紛争に翻弄されることとなり、商品陳列館は休館状態となった。商学部の教授会で議論の末、商品陳列館は存置と決定し、1973年に運営委員会が再発足すると、あらためて伝統的手工業製品(=当時の呼称、本稿では社会的にオーソライズされている「伝統的工艺品」を使用)を収集・展示する方針が確認された。その翌年に、通商産業省(現経済産業省)が「伝統的工艺品産業の振興に関する法律」(略称:伝産法)を制定することになる。

伝統的工艺品産業の調査

館の再興と同時に、運営委員(商学部教員)が調査地を選定し、各地の伝統的工艺品の産地へ赴いた。その成果は



再興された頃の商品陳列館

これもまた再興と同時に発刊した『明大商品陳列館報』誌上に報告が掲載され、当時の伝統的工艺品産業の状況を知ることができる。1976～84年度における調査報告からは、中高年の主婦層のパート労働に依存する問屋制家内工業、農林水産業の衰退から来る道具類の需要低下、原材料供給の不調、半農半工芸という生業の破たん、市場評価や計数管理の欠落した経営の未熟などが報告されており、時代の変化に翻弄される産地の苦境が知れる。実際、収集された桐火鉢（石川県金沢市）、イムシ籠（＝魚を入れる籠・熊本県宇城市）などはほぼ最後の一個というものだった。一方、古式製法の継承や生活文化に根差した工艺品のあり方などが注目されていた。

ところで、伝統的工艺品自体は生産量も販売額も工業製品全般の中では微々たるものである。例えば、有田焼や美濃焼は相応の産地規模を持つが、主体は機械工業製品なのであり、手作りの伝産品はそのわずかな部分である。また、上記のように業態自体が旧態依然としたものであった。そのため、先細りの産業への処方箋の提示といったごくごく限定的な作業を除けば、当時の商学研究の対象一般となり得るジャンルであったとは思えない。実際、運営委員の中にそれを専門分野とする教員がいたわけでもなかった。

収集・展示の背景

それでは、何のために伝統的工艺品の産地を調査し、製品が資料として収集・展示されていたのだろうか。残念ながらそれを具体的に述べた文面は遺されていないが、当時の商品陳列館刀根武晴館長が筆を執った『明大商品陳列館報』の巻頭言からその背景となった状況を探ってみたい。そこからは、高度経済成長終焉後の混沌とした市場の状況が知れる。「従来の市場環境ならば確実に流通された商品が、どうも流



三線の展示

通しない…消費者は変わった…どのように変わったのかが、まったく不确实（3号・1979）」「不确实性の時代、不透明の時代、乱気流の時代、選択の時代など色々な形容詞を冠して呼ばれる1980年代（5号・1981）」といった記事が見られる。そして、第6号（1982）では、そうした状況を打破すべき「現代文明の原動力」について言及されている。「本来の人間らしい生活の中で、われわれ人間がどのように才覚を発揮して商品形態を作りあげ、生活文化を形成させてきたかを今こそ見直す」べきであり、それは「以前の伝統的な社会において…単に商品生産のための技術ではなく、生活のための技術が文化として存在していた…いわゆる手づくりの文化はそうした内容をもつものであった…近辺に在る自然の中から素材を発見して、器用こまめに生活用具を作りあげ」てきたことだとする。つまり、ここで言う「手づくりの文化」「生活用具」の具体例として伝統的工艺品が収集・展示されてきたということになる。

その後の貿易環境の変化やIT革命の影響など四半世紀前とはかなり様相を異にする今日においても、ある種の相似性を持った1980年代における収集品とその評価として、見過ごしにできない動向を最後に紹介しておきたい。沖縄の楽器、三線（三味線・1983年収集）は、本土復帰後の海洋博を機に観光土産としての需要を当て込んでビニール製の量産品が製造されたが全く不評であった。しかし、民族文化復興の機運の下、沖縄音楽への関心が高まったことから、伝統製法による“本物”は生産が需要に追いつかない隆盛を見るに至った。この地方文化に対する再評価の中で伝統製法による製品が受容されていったという動向は、展覧会名とした“地方創生”において最も核心的な部分なのではないかと考えられる。

杉田遺跡の土器

杉田遺跡は、神奈川県横浜市南部の三浦半島北帯の丘陵地帯に立地し、東に東京湾、西の谷間には大岡川が流れ、標高60～70mの独立丘陵の平坦部に位置する。現在の横浜市磯子区杉田2丁目にあたる。なお、遺跡の北西側斜面一帯には杉田貝塚が存在し、当館常設展示室で貝層の剥離標本を展示している。

1949年12月、当時武相高等学校に在学中の鶴木晶が採集した土器片をきっかけに、1950年3月17日～19日に明治大学考古学研究室による第1次発掘調査が行われ、同年6月25日に第2次発掘調査、1957年3月18日～23日に第3次発掘調査を実施し、多くの遺物が出土した。

出土した遺物は、縄文時代晩期後半期の土器群が大半を占め、他には石鏃、磨製石斧、石棒、石剣、石刀、土版などがある。

明治大学教授（当時）の杉原荘介、専任講師（当時）の戸沢充則らによる検討の結果、土器群は「杉田A・B・C・D・E類」に分類された。

A類は量が多く、そのほとんどが口径40cmほどの大形の鉢形土器で、他に浅鉢や壺（写真1）が少量見ついている。鉢形土器の口縁部は波状と平らなものがある。文様は、縄文のない太い沈線のヘラ描きによるもので、三叉状入組文、菱形区画文、列点文、弧線文などがある。B類には全体を復原できる器形のものがなく、太い沈線で囲まれた磨消縄文を特徴とするものの、文様が大柄のため全体像は把握できず、部分的に三叉状の入組文などがある。C類では写真2（口径42.5cm高さ19.6cm）のような大形の浅鉢形土器が主体となり、波状口縁のものが見られなくなる。胴部に見られる磨消縄文が主体文様となり、雲形文は単純化・直線化していく過程の様相を呈している。D類になると薄手で小形になり、口縁部が屈折するものが目立ってくる。文様は、変形工字文や浮線網状文など種類に富んだ浮線文で、C類で盛行した磨消縄文や縄文自体が用いられなくなる。E類は、関東地方固有のものでもなく、東北地方のものとも言えない、東海地方から近畿地方の土器に似た様々な型式がまとめられている。

関東地方における縄文時代晩期の土器型式の研究は、戦前に山内清男が埼玉県川口市の安行領家猿貝塚などの土器によって安行式土器の型式を分類して以来進展が見られなかつ

たが、1949年の杉田遺跡をはじめ神奈川県桂台遺跡や群馬県千網谷戸遺跡の発掘調査で、晩期の後半期に属する土器がまとめて発見されたことが研究を進める契機となった。以後、晩期については「安行3a・3b・3c・3d式」に細分され、これは東北地方を代表する亀ヶ岡文化の大洞式に並行するとされた。

こうしたなかで、杉田遺跡の土器は、古い順に「A類・B類を杉田I、C類を杉田II、D類を杉田III」として3つの時期に分けられた。そして、杉田Iが大洞C₁式、杉田IIが大洞C₂式、杉田IIIが大洞A式とそれぞれ並行するとされ、関東地方における縄文時代晩期の土器編年の指標の一つになったのである。

（海沼 真澄）

- 〈参考文献〉
- ・杉原荘介・戸沢充則1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第2巻第1号東京考古学会
 - ・明治大学考古学博物館 1991『明治大学考古学博物館蔵品図録2 縄文晩期の世界』
 - ・新屋雅明 2015『縄文時代後・晩期土器編年の研究—加首利B式～安行式土器群の変遷—』六一書房



写真1 小型壺形土器

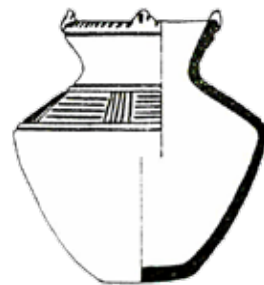


図1



写真2 浅鉢形土器

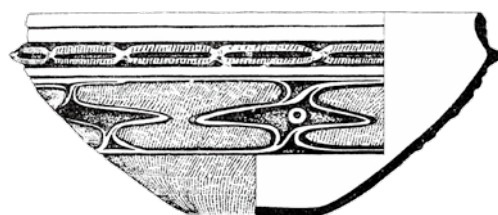


図2 図は杉原荘介・戸沢充則（1963）「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第2巻第1号より転載

学術シンポジウム「博物館・美術館における参加・体験型プログラム」を開催

前年度の東京開催に引き続き、博物館教育をテーマとするシンポジウムを、11月26日(月)、南山大学を会場として開催しました。午前中のワークショップは、人類学博物館を会場に常設展示を使った「触る」プログラムの実見と、三重県立博物館の大野照文館長による体験学習プログラム「貝体新書」が開催されました。「貝体新書」は大野館長が京都大学総合博物館に在職中、文部科学省の委託事業として博物館教育の専門家を交えて開発した、ハマグリと殻の形状観察によるプログラムです。貝殻の内側にある円形にへこんだ部分は何か?(答え:貝柱が着いていた所)それは何ヶ所あるか?という問いから始まり、最終的に貝の体部の構造・役割と殻の形状の関わりを理解することができましたが、モノの「観察」、それを基にした「推理」、事実の「確かめ」という段階を踏むこと、「確かめ」に行き着くまでのグループによるディスカッションといった、効果的な「学習のプロセス」が踏まれたことが印象的でした。特段、貝に興味が無くとも、そのプロセスによって参加者は学習に惹きつけられます。

午後はR棟65教室に会場を移し、大野照文館長の基調報告「参加・体験型プログラムが拓く学びの未来」に続き、実践報告・研究発表として、藤島美菜(愛知県美術館)「ひと・モノが拓く一ふれる世界の広がり 盲学校との連携を中心に」、藤村俊(美濃加茂市民ミュージアム)「身体で確かめる「古墳」・「ダム」、鈴木康二(ちゃいれじ事務局長)「めざすのは‘1対1’～未就学児向け

ちゃいれじ歴史系ワークショップの実践～」、外山徹(明治大学博物館)「英国の博物館教育における展示物の見せ方について—ワークシートの設問分析を通して—」の各報告及びディスカッションがおこなわれました。博物館・美術館における“実物”が存在することによって特徴付けられる教育のあり方、ただ目で見ただけではなく五感に訴える学習のあり方、これまで主たる利用者とは考えられて来なかった視覚障がい者や幼児へのサービスの拡張など、進化する博物館教育の実践について知ることができました。



シンポジウムの様子

在学生向け特別講義

南山大学から黒沢浩先生をお迎えして、11月6日(金)の4・5限、学芸員養成課程の講義「博物館実習」の講義枠を用い、「ユニバーサル・ミュージアムを目指して」「“展示”という表象をめぐって」の2本の講義をいただきました。特に視覚障がい者による利用を意図した南山大学人類学博物館のさまざまな試み、また、一步間違えると重大な誤解や人権侵害を招きかねない展示表象の問題は、特にセンシティブな対応を求められる民族誌資料を用いているがゆえ、博物館の課題として説得力がありました。



今回は、別置図書資料について取り上げます。

明治大学博物館図書室は、約12万冊に及ぶ図書と約3,000タイトルの雑誌を所蔵しています。発掘・一般・図録・参考・雑誌に区分けして配置場所を定め、それぞれ請求記号を付与し排架しています。

図書資料の中には、定められた配置場所とは異なる場所に排架されているものがあります。WebOPAC(明治大学蔵書検索)の検索結果画面では別置資料かどうかの判別が難しいため、利用者の方から排架場所を尋ねられる場合もあります。

特に問い合わせが多いのは、WebOPACの検索結果が「配置場所:博物館一般 請求記号:○○○/○○○//D(H)」と表示される、かつて明治大学中央図書館で所蔵されていた資料です。博物館図書室資料の請求記号の末尾(所蔵館記号)はMですが、中央図書館で所蔵されていた資料はD(またはH)となっているため、一般図書の書棚ではなく、図書室入口に近い書棚に別置しています。発掘調査報告書など考古学に関わる資料を1,318冊(和書874冊、洋書444冊)排架しています。刊行年の古い資料が多く、所蔵館が僅少な資料や大型本も手に取ってご利用いただけます。19世紀の洋書や、保存状態が良好でない資料は別室で保管していますが、状態によっては閲覧や複写が可能です。書棚に見当たらない場合は博物館事務室図書担当までお問い合わせください。

M2カタログ

考古Tシャツ・ボールペンがリニューアル



Tシャツ 1,100円

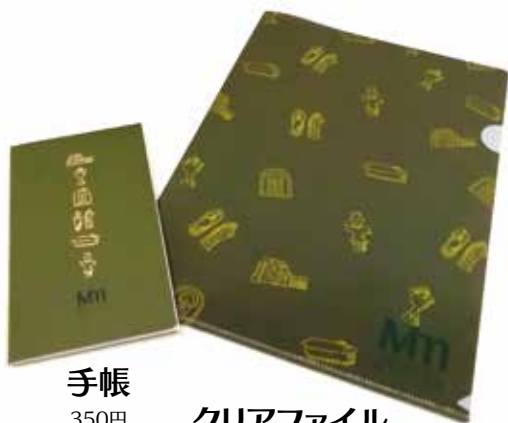
茨城県玉里舟塚古墳がモチーフのTシャツに新色のグリーンが登場。前方後円墳を囲むように、家形、馬形、円筒、人物など、色々な種類の埴輪がプリントされています。サイズはS・M・Lをご用意しています。



ボールペン 300円

古墳・土偶・石器・銅鐸のモチーフがプリントされた、赤・青・黒の3色ボールペンです。

手帳・クリアファイル販売中



手帳
350円

クリアファイル
100円

手帳下冊にはワンポイントイラスト入り



2018年度特別展「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」の開催を記念して販売を開始し、2018年下半期のグッズ売上トップ2となりました。ガウランドに関する古墳や出土品をモチーフにしています。また、手帳は多くの考古学者が愛用するフィールドノートをイメージしており、持ち運びに便利なサイズです。



クリアファイル (ガウランド)



手帳 (ガウランド)



考古マスキングテープ

ミュージアムショップ
開室時間

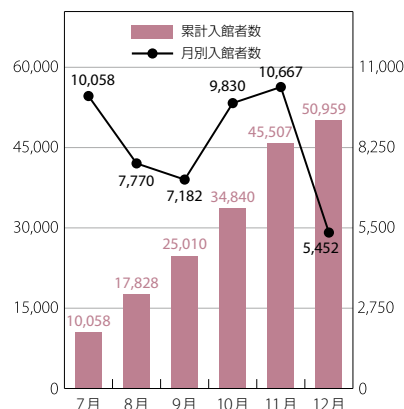
月～金 10:00～16:30
土 10:00～12:45 (2018年12月8日より変更となりました)
※日曜日・祝日・大学が定める休日・8月1日～9月19日の土曜日は休業
※販売品・価格・開室時間は変更をすることがあります。

博物館入館者数の動き (2018年7月～12月:延べ人数)

累計入館者数(7～12月) 月別入館者数

2004年4月以降の
総入場者数累計 **1,036,460**人

| 7月～12月 | 延べ人数 |
|---------|--------|
| 図書室利用者数 | 3,606人 |
| 教室等利用者数 | 1,866人 |



| 特別展示室来場者内訳 | | 開催日数 | 来場者数 |
|------------|--|------|-------|
| 7/7～8/5 | 法政大学・明治大学・関西大学 三大学連携協力協定締結記念特別展示 ポアソナードとその教え子たち | 30日間 | 3866人 |
| 8/22～9/18 | 地方創生の機運－1970～80年代の伝統的工芸品収集－ | 28日間 | 2280人 |
| 10/13～12/2 | ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究 | 51日間 | 4754人 |

団体見学の記録 2018年7月～12月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

【一般】 台湾貿易センター東京事務所 (10名) / 都内俳句の会 (6名) / 明大昭和39年卒学生経営経済学研究会 (7名) / 潮来市立潮来小学校PTA (31名) / 上尾・古河カルチャーセンター (9名) / 世田谷区生涯大学同窓会 (6名) / 船橋市民大学 ロッケン会 (25名) / おっばま はっけん倶楽部 (15名) / 三木会 (5名) / 株式会社シービーツアーズ (11名) / 播与漆工芸教室 柴田組 (30名) / 小平市シルバー大学25期会 (11名) / 文京区立金富小学校 校内人権研修 (25名) / 燕市議会 スワロークラブ 大河の会 (7名) / 一声会 (26名) / 品川区ウォーキンググループ プラタナス (9名) / 赤羽電気愛交會 (8名) / 現代社会34歩行会 (8名) / よみうり川越カルチャー 古地図散歩 (9名) / 楽歩会 (28名) / いきがい大学埼玉 (9名) / お茶の水管弦楽団 (7名) / NECソリューションイノベータ (15名) / 茅ヶ崎 茅友会 (10名) / サロン話の泉 (10名) / 日本ジョージア会 (37名) / 常磐大学高等学校PTA (45名) / 栃木県立栃木翔南高等学校PTA (55名) / 船橋市民大学八・二会 (10名) / 東京漫歩 (19名) / 群馬県立桐生高等学校PTA (41名) / アジア航測株式会社OB会 (16名) / 掘船研究会 (20名) / 真宗大谷派北海道教区死刑制度問題班 (7名) / 神田交通ユーバス旅行会 (13名) / 毎日文化センター (16名) / サクサ社友会目黒支部 (17名) / 足立歴史サークル (8名) / お散歩だんらんの会 (10名) / 新老人の会 (15名) / 世田谷生涯大学ハッピー35 (22名) / 葛飾区郷土と天文の博物館 考古学ボランティア (30名) / 船橋市民大学Wクリック (15名) / 長野県長和町公民館明大キャンパスツアー (14名) / 神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校PTA (30名) / 中友会 (東京都立中学校退職校長の会) (40名) / いちなな会 (8名) / 美浜セカンドステージの会 (26名) / TCGC東京シティガイドクラブ (78名) / 全日本年金者組合所沢支部 (20名) / 川口地区保護司会研修部 (10名) / スクールFC お茶の水校 (15名) / 鎌倉親幕府の会 (11名) / ふれあいウォーカーズ (20名) / 町田国際版画美術館友の会 (20名) / 練馬区武蔵関トリム体操会 (29名) / カルソニックカンセイ シニアーズクラブ (28名) / 青山学院大学法学部同窓会 (20名) / 会津若松法人会 女性部会 (7名) / 上高津貝塚土器づくりの会 (15名) / 健寿会 (10名) / 歩行会29 (20名) / 日本考古学協会 フレンドシップ会員 (10名) / 株式会社オカムラ (28名) / 悠遊会 (4名) / 手島会 (4名) / 明治大学商学部 三上富三郎ゼミ10回生 (8名) / 鷺宿平成クラブ (19名) / 歩こう会 (20名) / 日本史を楽しむ会 (14名) / ウォーキング東京都 (14名)

【小・中学校】 中国成都市学生一行 (26名) / 八王子市立第一中学校 2年生 (5名) / 葛飾区立青戸中学校 歴史文芸部 (10名) / 山形県南陽市立宮内中学校 3年生 (20名) / 武蔵村山市立第三中学校 (6名) / 新宿区立新宿西戸山中学校 (5名) / 大田区立大森東中学校 2年生 (26名) / 明治学院中学校 (51名) / 獨協埼玉中学校 (6名) / 練馬区立開進第三中学校 1年生 (11名) / 武蔵野大学附属 千代田高等学院 (17名) / 立教新座中学校 (33名) / 高崎市立箕郷中学校 (5名) / 府中市立府中第八中学校 (42名) / 足立区立谷中中学校 2年生 (6名) / 北区立滝野川紅葉中学校 1年生 (5名) / 戸田市立新曽中学校 2年生 (12名) / 練馬区立石神井東中学校 2年3組4班 (7名) / 江東区立深川第五中学校 (133名)

【高等学校】 茨城県立水戸桜ノ牧高等学校 (42名) / 新潟産業大学附属高等学校 2年生 (45名) / 茨城県立石岡商業高等学校 2年生 (25名) / 星野高等学校 2年生 (86名) / 追手門学院中・高等学校 (6名) / 大原学園高等学校 2年生 (17名) / 東京都立桜町高等学校 2年生 (36名) / 東京都立昭和高等学校 2年生 (45名) / 神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校 (13名) / 明治大学附属中野高等学校 1年生 (25名) / 高崎健康福祉大学高崎高等学校 1年生 (93名) / 長野県上田高等学校 2学年 (43名) / 文理開成高等学校 (90名) / 東京都立神津高等学校 1年生 (21名) / 神奈川県立七里が浜高等学校 2年生 (61名) / 新潟県立新発田高等学校 (8名) / 長野県上田染谷丘高等学校 1年生 (43名) / 茨城県立水戸商業高等学校 (86名) / 千葉県立東金高等学校 1年生 (42名) / 栃木県立佐野東高等学校 2年生 (41名) / 日出高等学校 2年生 (40名) / 茨城県立太田第一高等学校 1年生 (42名) / 長野県松本蟻ヶ崎高等学校 (45名) / 広島県立広島皆実高等学校 (8名) / 群馬県立前橋東高等学校 1年生 (42名) / 茨城県立水戸第二高等学校 (45名) / 高崎市立高崎経済大学附属高等学校 (40名) / 富山県立富山南高等学校 (47名) / 茨城県立中央高等学校 1年生 (42名) / 千葉県立銚子高等学校 1年生 (7名) / 千葉県立佐原高等学校 1年生 (5名) / 埼玉県立川口高等学校 (80名) / 茨城県立水海道第一高等学校 1年生 (37名) / 西武台千葉高等学校 (19名) / 東邦大学付属東邦中・高等学校 (20名) / 茨城県立取手松陽高等学校 1年生 (20名) / 千葉県立安房高等学校 (15名) / 水戸女子高等学校 1年生 (22名) / 浜松修学舎高等学校夢みらい科 1年生 (15名) / 茂原北稜高等学校 1年生 (18名) / 瀧野川女子学園高等学校 2年生 (22名) / 茨城県立石岡第一高等学校 1年生 (84名) / 鹿児島高等学校 2年生 (10名) / 大阪府立寝屋川高等学校 2年生 (15名) / 東京都立武蔵丘高等学校 1年生 (40名) / 富山第一高等学校 (45名) / 大妻中学高等学校 (3名) / 群馬県立太田高等学校 (6名) / 岡山県立和気閑谷高等学校 (5名) / 駒沢学園女子高等学校 1年生 (16名) / 大成高等学校 (3名) / 太田市立太田高等学校 (40名)

【大学・大学院・専門学校】 サンパウロ大学 (12名) / 中国電子科技大学 (39名) / 北京外国語大学学生訪問団 (19名) / 「日中植林・植樹国際連帯事業」清華大学学生訪日団第2陣 (32名) / 神戸学院大学法学部 佐藤ゼミ (19名) / 明治大学商学部 (14名) / 明治大学経営学部 小関ゼミ (6名) / 鳥取大学 (9名) / アウグスブルク大学 法科専攻 (20名) / 大東文化大学博物館展示論履修生 (15名) / 明治大学文学部 江川ゼミ (15名) / 早稲田EDU日本語学校 (19名) / 明治大学 村田ゼミナール (13名) / 武蔵野学院大学 鈴木ゼミ (18名) / 文教大学国際学部 井上ゼミ (16名) / 上智大学法学部 刑法ゼミ (6名) / 駒澤大学文学部歴史学科考古学専攻 (15名) / 明治大学文学部史学地理学科アジア史専攻 (8名) / お茶の水女子大学 (6名) / 明治大学政治経済学部 小西徳應ゼミナール (20名) / 明治大学大学院政治経済学研究科 石川研究室 (15名) / 京都文教大学 (27名) / パンタンゲームアカデミー ノバル・シナリオ専攻 (9名)

来館者は十人十色

展示解説ボランティア

毎年春の黄金週間明けに某大学の学生が大挙して刑事部門の見学に来館します。聞けば「法律概論」を履修している法学部の学生が、授業の一環として明治大学博物館刑事部門を見学してレポートを提出せよと教授から課題を出されたのだそうです。

夏休みには、受験する大学の下見に上京する高校生が多数来館します。事前に本学のホームページを見て博物館の存在を知った上で来館する猛者もいます。彼らや彼女らには「ぜひ本学に入学して学んで欲しい」とエールを送ります。

近年、複数の旅行会社が「都内博物館巡り」を催行するようになり、前期高齢者の年齢を超えたと思しき人たちが、海外からの観光客も多く来館するようになってきました。我々解説ボランティアの言語力での対応で大丈夫だろうか些か不安があります。自由な時間を多く持っている高齢者の団体からは、昨年設置されたベンチが好評でいつまでも座っておしゃべりに夢中になるご婦人方もいらっしゃる。

ハンズオンの展示コーナーで、三味塚古墳出土の甲冑レプリカを、来館者に「装着できますよ」と声を掛けると、修学旅行で来館した中学生や高校生は目を輝かせ、級友が装着しポーズをきめたところを記念撮影します。なかには嫌がる男子生徒に「装着しなよ!」と命令する女子生徒もいます。末、頼もしいと言うか恐ろしいと言うか。

また、本学を卒業し都内の某中学校に教員として働いた方が先鞭をつけて、本博物館見学が伝統行事となった学校もあります。千代田区内の小学校からも歴史の授業として児童が来館します。刑事部門には児童が入らないよう引率の教諭が立ち塞がります。これも教育的配慮?

今年の年明け早々の木曜日、本学商学部の学生が商品部門に大挙押し寄せました。なんでも、商品部門の展示コンセプトをレポートにして次週月曜日までに提出する由。学部の先生方も博物館を授業に絡めて有効に活用して頂いていると感じる次第です。

明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会
メールアドレス: meihakutomonokaig@gmail.com

※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ず「ハガキ」または「Eメール」をお願いします。

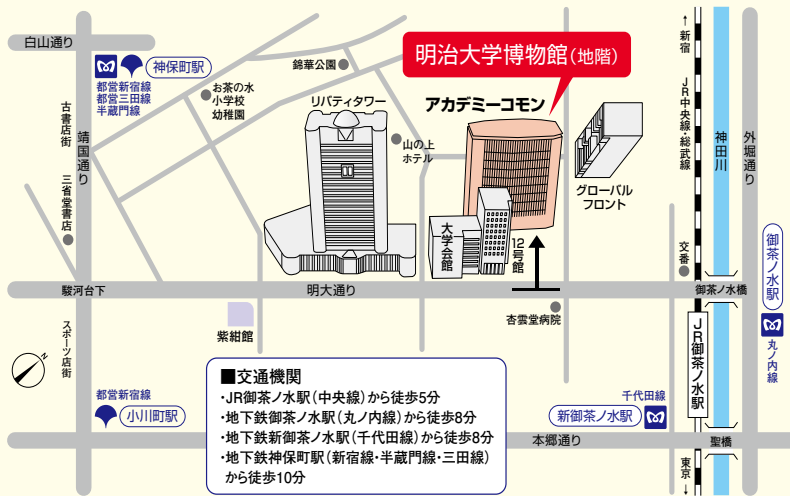
博物館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
10:00~17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10~8/16)
冬季休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月~土 10:00~16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
夏休期間(8/1~9/19)中の土曜日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



- 交通機関
- ・JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
 - ・地下鉄御茶ノ水駅(丸ノ内線)から徒歩8分
 - ・地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
 - ・地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

編集後記

特集を組ませていただきましたように、今年で明治大学博物館も90周年となります。これも皆様の厚いご愛顧の賜物であり、この場をお借りして感謝申し上げます。100周年という節目の年まであと10年。これからも研究を積み重ね、皆様に成果を発信し続けて参りたいと思います。今後とも変わらぬご支援を頂けると幸いです。